

平和大学講座 2022年3月10日
「宗教はコロナ後の共生社会をどう目指すか」
パネル発題

天理大学おやさと研究所 金子 昭

【内容】 基調発題を受けて

1. 時代の流れの中のコロナ禍
2. 宗教の直面する現実
3. 祈りのある暮らしをつくる
4. 宗教の基本は変わらない

どの時代も常に危機の中にある 危機は同時に転換期ともなりうる

- 神の試練は人間の意表をついて現れる
- 災害、疫病、戦争・・・コロナ禍もその一つ
- 宗教者に科学リテラシーが問われた
- 信仰や祈りは直接、事実の変更を行うことはできないが、思いの世界を変えることで、現実を変革することができる
- 人間の強みは心の自由を与えられていること

1995年

阪神淡路大震災 ボランティア
オウム真理教事件 カルト

2011年

東日本大震災 絆 宗教協力

臨床宗教師

2020年〜現在

コロナ禍 自粛 社会的距離

時代はどっちへ？

キーワードは？

2016年～2030年 SDGs
15年間の目標

宗教が不可避免的に直面する現実

コロナ禍以前からの現象、コロナ禍で決定的に

- DX(デジタルトランスフォーメーション)の浸透
- 宗教の「私ごと」化の進展
- 社会貢献において求められているのは、本来の救済価値ではなく、付加価値での貢献
- 社会の問題は変わっていないが、人々の意識が変化してきた



- 宗教(者、組織、界)がなすべきこと

過去の成功体験はごみ箱へ 戦略的撤退も大切

成長・発展から、成熟・充実へ 更なる臨床的実践

宗教の「持続可能性」 —とくに宗教組織のあり方に着目して—

- 持続可能な組織は、持続可能な社会と連動
- 時代の変化にしなやかに合わせていく
- 世界の動きに先駆けた発信と行動
- 組織改革は慎重に：むしろ新しい活動領域を模索することが大切

新しい酒は新しい皮袋に盛れ(マタイ伝9:17)

世界全体の目標にあわせて SDGs(持続可能な目標)を先導する

- 国連SDGs(Sustainable Development Goals):2016
～2030年の15年間の目標:
地球上の**誰一人取り残さない**ことを誓う
⇒**コロナ後の時代もこの中に**
- 宗教は、祈りとその慎みの行いを通じて、人間にも
自然にも働きかけることができる その信念
⇒**祈りのエビデンスは行いで実践していく**
- コロナ後も再び疫災はくる可能性:
コロナ禍から学んだことは大自然との関わり

社会に向けて祈りのある暮らしをつくる

- 日本社会の**誰一人取り残さない**ことを目指して
- コロナ禍中の現在⇒コロナ後の時代が続くもの：宗教施設（ホーム）での活動はよりいっそう信徒の家（ホーム）に連結へ DX化と対面の活用
- 高齢多死社会に入る時代での社会との関わり **支援**

(1)無縁社会は終わっていない

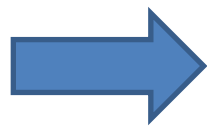
核家族の時代、子供が独立し配偶者がなくなれば独居状態になり、やがて本人の死と共にその家は消滅

(2)従来の宗教は家単位で人々を繋ぎ止めてきた 今後はこれに加えて個の単位での繋がりを図っていくべき

宗教の基本は変わらない 過去・現在・未来の〈いのち〉へのケア

- 過去を振り返って:

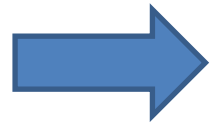
慰霊や鎮魂を通じて記憶を未来に届ける



死をも含めた〈いのち〉への**共感**

- 現在に対して:

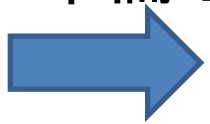
緊急支援⇒復興支援⇒日常支援(**支縁**)



今、ここでの〈いのち〉への**支援**

- 未来に向けて:

生命倫理、原発問題、戦争の危機など



将来世代の〈いのち〉への**責任**